榆木小学校　学校通信
No.４０
なりたい自分になる！
PLUS ULTLA
令和７年２月７日
文責　余宮

２月が始まりました。１日の時間はゆっくりなのに、１年たつのは早いと感じてしまうのは私だけでしょうか。

八百万の神々

令和７年は巳年、いわゆるへびの年ですね。今の５年生と６年生のお子さんの年です。巳年にちなんで、マスコットを付け替えたと話すお子さんもいました。初詣に出かけたという話も聞きましたし、初日の出や初山登りで手を合わせた、という話も聞きました。健康に感謝しながら、巳年ならではの「変化」を楽しんでほしいと思った次第です。

中には蛇が苦手という方もいるのではないでしょうか。実は、私も少々苦手でして（というより、生き物一般がどうも苦手です。虫も動物も動くものはどうも）。しかし、巳（へび）には、再生と復活（脱皮して生まれ変わる様子から）や変容と成長（蛇がグニャグニャとなりたいように姿を変化させる様子から）などの意味があるとのこと。加えて、先人は、巳（へび）は神に仕える（一説には神そのもの）神秘性があると思っていたそうです。それと同時に、知恵や深い洞察ができる賢者の化身だともとらえていた。大変崇高な生き物ですね。

このように、日本人は様々な場面で「神」を見出して生きてきた。今号は、日本最古の書物といわれる「古事記」を参照しながら、少し「日本人」について想いを馳せてみましょう。

古事記は、社会や国語の教科書にも掲載されている、日本人には大変なじみの深い書物といえるでしょう。ただ、恥ずかしながら私はこの年までちゃんと読んだことはありませんでした（とはいえ、今回も当時の漢文で書かれた古事記そのものをちゃんと読んだわけではありませんが…）。なんと、登場人物がほぼ神様。それもおびただしい数の神々。３００人（神様を数える単位は「柱（はしら）」というそうですが、便宜上「人（にん）」にしました）越え！

このおびただしい神様の数は、欧米ではなかなか理解できないものだとのこと。確かに、欧米で信仰される宗教のおおよそは、一神教の場合がほとんど。だから、神様がたくさん出てくることそのものに、どうやら違和感を覚えるらしい。

なぜ、日本の昔話には神様がたくさん出てくるのか。これは、日本人の見方・考え方が宿っている、といわれています。私たちを取り巻く四季折々の大自然。日本人は、この大自然に「生かされて」いるという感覚がある。だから、様々な場所に神を見出します。初日の出に拝む。大樹にこうべを垂れる。食べ物に手を合わせる。・・・ありとあらゆるものに、生かされていることに、感謝（畏敬）の念をもつ。何か悪いことをしようものならば、「誰も見ていなくても、神様が見ているんだから」といわれながら、育ったことを思い出しました。

私たちの周りには、八百万の神様が宿っている。

これは、神様を信じなさい、というよりも、自然の中で生きている一つの生き物として、人間は謙虚に生きていくべきだという、日本人としての矜持ではないか、と私は思います。自然を人の力で変化させ、屈服させ、そして都合よく従事させることは、やはり人としての傲慢さの表れではないかと、つい思ってしまいます。

謙虚に自然との共生を実践することこそ、これからの持続可能な社会で不可欠な理念だと、そう書きながら、古事記の力を借りて今号は少々小難しい話になってしまいました。恐縮です